

嘘と正典

装幀：早川書房デザイン室

目次

魔術師 5

ひとすじの光 45

時の扉 83

ムジカ・ムンダーナ 115

最後の不良 161

嘘と正典 185

魔 術 師

「私の師匠であるマックス・ウォルトンは、ロサンジェルスの小さなバブではじめて会ったときにくう言いました。『マジシャンにはやってはいけないことが三つある。お前は知っているか?』と——」

観客席を映していたカメラがステージを向く。照明が少しずつ明るくなり、暗闇がぼんやりと白く光る。ステージの中央には、タキシードを着てシルクハットをかぶった竹村理道たけむらりどうが立っている。年齢の割には老けているように見えるが、それでもまだ十分に男前だ。自分に注目が集まったとわかると、彼は不敵に微笑んで観客席を眺めまわした。この視線だ。いつもこの視線に心臓が高鳴ってしまう。彼の視線は何かの電波を発するみたいに、人々の頭を麻痺させる。それは最大の武器だった。その武器のおかげで彼は日本マジック界の頂点に立った。そしてそれだけでなく、幾人もの女性を惑わせて数億円もの金を借り、最終的に自らの人生を破壊して

しまった。

「——私は正直に『わかりません』と答えました。なぜなら、当時の私は『やってはいけないこと』など存在してはならないと思っていたからです。『やってはいけないこと』を決めてしまうことが、むしろマジックの可能性を狭めているのではないか。ステージの上ではあらゆる現象が起こり得るのではないか、と」

タイミングはバッチリだ。理道が指を鳴らした瞬間、ステージ全体が明るくなり、彼の後ろに黒く巨大な装置が置いてあったことがわかる。装置の中央には筒状のガラスがついていて、その上下から複雑に伸びた配線が横の機械に接続されている。機械の上には大きなモニターが吊るされていた。

一九九六年六月五日十九時十二分。

モニターの下部には意味ありげな赤い文字で、時刻がただ映しだされているだけ。

十二分が十三分変わる。

「マックス・ウォルトンは一つ目に、『マジックを演じる前に、説明してはいけない』と言いました。どういう意味でしょうか？　そうですね、私は今から鳩を出します」

理道はかぶっていたシルクハットを取り、そこから次々に五羽の白い鳩を出していった。それはマジックではなく、芋掘りのようだった。理道は出した鳩を淡々とステージの暗闇に放っていく。観客たちはどういふ反応をすればいいのかわからず静まり返ったままだ。静寂の中に、

誰かが咳きこむ音が虚しく響く。

「わかりましたか？ 鳩を出します、と宣言してから鳩を出しても、誰も驚きません」

ステージの袖から大きな羽根で覆われた、派手な衣装を着たアシスタントの女性が歩いてきて、ゆっくりとした手つきで理道が出した鳩を回収した。女性は捕まえた鳩を一羽ずつ羽根の間にしまっていた。最後の鳩が見えなくなると、理道は小さく会釈をして、観客席を眺めわして微笑んだ。

何かが起こる。そんな空気が漂う。

理道は背中から宝石で装飾された杖を出し、アシスタントに向かって杖を持った右手を伸ばした。

その瞬間、アシスタントの女性が消えた。

観客席から驚きの声が漏れる。

「このように、何も言わずに突然何かの現象を起こすことで人々は驚くのです。マックス・ウオルトン

は正しかった」

すぐに大きな拍手が生まれた。二十二年前の僕も、最前列で拍手に加わっていたはずだ。僕はまだ十歳だった。隣に座っていた年の離れた姉は拍手に加わらず、僕の耳元で小さく「マスコット・モスね」とつぶやいた。「こんなことで拍手なんてしなくていいのに」

今、僕は自宅のリビングで理道の最終公演の映像を見ている。それはつまり、コマ送りにすれば、彼がどのようにして女性を消したのか一目瞭然だということだ。三十二歳になった僕は「マスコット・モス」の意味も知っているし、理道がアシスタントを消した手段もわかっている。仕組みは思いのほか複雑だ。アシスタントが鳩を回収している間に、彼女の衣装を針金とチューブで支える。すべての鳩を回収し終えたと、理道が派手な杖を出す。そのとき、実は彼女は鳩と一緒にこっそりステージ下へ消えていて、理道の前には衣装だけが残っているのだが、大げさな衣装のせいで観客席からはわかりづらくなっている。理道が抜け殻になった衣装に杖で魔法をかける。衣装が小さな隙間から一瞬にしてステージ下に引きこまれ、アシスタントが消えたように見える。

「マスコット・モス」
「消える美女」の完成だ。

「マジシャンがやってはいけないことの二つ目は、『同じマジックを繰り返してはいけない』で、三つ目は『タネ明かしをしてはいけない』です」

理道は胸元から出したシルクのハンカチを斜め上に放り投げた。ハンカチは遠くへ飛んでいき、天井の近くで舞台袖に入ると鳥のように会場中を飛びまわりはじめ、最後に理道の手元に戻った。静寂ののち、観客席から驚きの声と拍手が聞こえた。

ハンカチが鳥に変わったからではない。理道がいつの間にかグレーの作業服姿になっていたからだ。

拍手が止んでから、理道は再び別のハンカチを取りだし、先ほどと同じように投げた。しかしハンカチの行き先を見る者は誰もいなかった。理道の後ろにかがんで現れたアシスタントが彼の背中を強く引くと、作業服の下から先ほどまでと同じタキシードが現れた。アシスタントはそのまま幕の後ろへ戻り、理道の手にハンカチが戻ってくる。観客席から大きなため息が漏れた。

「これで、マックス・ウォルトンの正しさがわかりましたか？」

観客席から笑い声が聞こえる。

『『繰り返さない』と『明かさない』です。この二つは似ています。マジックとは基本的に、仕掛けを知ってしまったらつまらないものばかりです。同じマジックを繰り返せば、タネを見破られる危険性が高まります。ましてや自分からタネ明かしを行うなど、もってのほかです——以上が『マジシャンがやってはいけない三つのこと』です。これはマックス・ウォルトンが考えたものではなく、ハワード・サーストンという偉大なマジシャンの言葉として、一般的に『サーストンの三原則』と呼ばれています。この三原則をはじめて聞いたとき、駆け出しマジシャンだった私は、こんなものはマジシャンの理想を制限する無駄な掟おきてだと感じました。先ほども述べましたが、マジックにはすべてが可能だと信じていたんです。何かを消すことも、何かを出すことも。みなさんの願望を叶えることも、大きな傷跡を癒いやすことも。『やってはいけないこと』を打ち破るのもまた、マジックでしょう。ですが、それからしばらくして、プロ

のマジシャンになった私は、『サーストンの三原則』の正しさを理解しました。それは間違はなく、セオリーとして従うべき掟でした。その正しさは、今みなさんにお見せした通りです。

『説明しない』『繰り返さない』『明かさない』の三つは、私だけでなく、すべてのマジシャンが守るべき掟とされています。そして、この禁忌を破ったステージは失敗する運命にあるのです」

マジックは演出がすべてなの——理道と同じようにプロのマジシャンになった姉は、僕が文化祭で披露したステージを見てそう言った。

当時高校生だった僕は、文化祭の奇術ステージで電磁石コイルを使うことに決めた。僕は「今から浮きます」と宣言し、ステージ下に隠しておいた磁石の力で少しでも宙に浮いた。それなりに反応はよかったが、後ろで見ていた姉は眉間に皺を寄せていた。

家に帰ると、姉はありきたりな「電磁石」というタネを、素晴らしい演出で傑作に変えた伝説のマジシャン、ロベール・ウーダンの話を始めた。アルジェリアの呪術師と魔術勝負をするようになったウーダンは、マジックに電磁石を使うことに決めたが、彼は電磁石の力を逆に使ったのだ。彼は金属の仕込まれた小さな箱を軽々と持ち上げてから、力の強そうな部族民の男をステージに呼んだ。ウーダンは男に向かって「力を奪う魔法をかけます」と杖を振った。男は箱を持ち上げようとしたが、電磁石の力でびくともしない。小さな箱を持ち上げようとしてバランスを崩した男を見て、部族民たちに笑いが広がった。マジシャンが呪術師に勝利した瞬

間だった。

マジックは演出がすべてだ。

今の僕はそれをよく知っている。もちろん技術や仕掛けも大事だが、それが活きるかどうかは演出にかかっている。上手に演出すれば市販のマジック品でも人々は驚くし、演出が下手だとどれだけ高度な技術があってもショーは台無しになる。「今から浮きます」と言って浮かすだけだった僕の舞台を、プロの姉がどういう風に見ていたのか、今だったらわかる。僕は、自分を浮かすために必要な演出をしなければならなかった。

「ですが、ここ最近、私は再び考え方を変えました」

理道が険しい顔をする。「何年もステージをしているうちに、まだ若造だったころの自分の声が、心の底から湧き上がってきたのです。やはり、マジックではすべてが可能なのではないか。ステージで奇跡を起こすことができるのではないか。大昔、まだ何も知らなかったころの私が正しくて、なまじ知識を得た私は間違っていたのではないか。さあ、紳士淑女のみなさま。今宵、私はサーストンの禁忌に挑戦します——」

丁寧「サーストンの三原則」の意味と価値を説明してから、理道はそう宣言した。

「——つまり、説明し、繰り返し、タネ明かしをします。なぜならその行為が、私のマジックを成立させるために必要な手順だからです。しかもその上で、みなさまに、歴史上実演されたすべてのマジックを上回る驚きを与えると宣言します。私はマジックに挑戦します。そして私

は、何も持たず、アメリカへ渡ったころの過去の自分に挑戦します」

ステージが暗転する。モニターに十九時四十分という赤い文字が不気味に浮かんでいる。見事な演出だった。

観客にまず、マジックの原理を理解させる。その上で、その原理に挑戦すると宣言する。理道は今からマジックをするのではない。マジックを超えた何かをするのだ。

この演出のポイントは、実際のところ「サーストンの三原則」がマジシャンの禁忌でもなんでもない点にある。「今からコインにタバコを貫通させます」と、次に起こる現象を説明してからマジックを行うマジシャンもいるし、似たようなマジックをタネだけ変えながら、何度も繰り返す演目もある。

まだステージは暗転したままだ。

スタッフが撮ったこの公演映像を、いったい何度見返しただろうか。

肝心の「歴史上実演された、すべてのマジックを上回る」マジックは、この段階では「巨大な装置」の伏線が敷かれただけだ。だが、この時点で僕を含む観客は、すでに理道の「演出」という魔法にかかっている。存在しない「禁忌」が存在するように思わされ、それに挑戦するマジシャンとして理道がこれから何をするのか期待している。

もちろん僕は、このあとどんなマジックが実演されるのか知っている。当時劇場でも観たし、映像でも繰り返し見た。

だが実を言うと、僕がもつとも感動したマジックは、このオープニングそのものだった。理道はタネを蒔き、観客に魔法をかけ、これ以上ないほど周到に、これから起こす奇跡の準備をしたのだ。

空前絶後のマジックを最高の状態で見せる——ただそれだけのために。

*

ウィキペディアによると、竹村理道の父——つまり僕の祖父——はアメリカ進駐軍相手の舞台で、フーディーニの演目「中国の水牢」の最中に事故死したことになるが、これは誤りである。出典元は悪評高い理道自身の回顧録だ。この本は彼のステージと同様、虚飾や誇張、ミステイレクションだらけなので、真偽には特に注意しなければならない。実のところ、理道の父は飲酒運転をして対向車線のトラックに突っこんで死んだ。残された母はそれから五年後、三十一歳の若さで自殺している。八歳の理道と六歳の弟は札幌に住む叔父の一家に預けられることになった。

どちらにせよ、実の父が進駐軍向けのマジックをやっていたことが彼の人生を変えた事実間違いなさだろう。理道は高校中退後、十七歳の若さで单身ロサンジェルスへと旅立つ。

「バンブー・リドー」という名前で小さな酒場や路上に立って、マジックで日銭を稼ぐんだ。宿

の見つけ方は簡単だった。レモンの中から観客が選んだランプが出てくるマジックがあるだろうか？ そのトランプに『今夜の宿がありません』って書いておくんだ。そうするとみんな大爆笑して、誰かが宿を提供してくれるのさ。そんなことを毎日繰り返してたよ」

回顧録のこの記述は嘘か誇張だと思われる。理道の弟は、ロサンジェルズにあった彼の下宿先に、叔父が多額の仕送りをしていたと証言している。だが十八歳のとき、小さな舞台でマックス・ウォルトンと知り合ったという記述は事実だろう。翌年のウォルトン一座の全国ツアーに理道の名前がある。

ウォルトン一座への所属は二年しか続かなかった。出演料をめぐって口論になったらしいが、これに関する真偽のほどは不明だ。とにかく理道は二十歳で日本に帰ってきて、デパートでマジック用品の実演販売を始めた。デパートの販売員だった母とはそのころに知り合ったようだ。二人は二年後に結婚し、翌年には姉が生まれている。

実演販売を続けながら、理道は小さな劇場やパブでステージをこなしていた。背が高くて見た目もよく、独特の低い声は劇場でもよく通った。技術もあり、四つ玉にはかなり定評があったが、マジシャンとしての知名度は低かった。そんな理道の人生は、一九七三年、二十七歳の彼が三越劇場で行なわれた奇術大会で優勝したことをきっかけに大きく変わる。

奇術大会を見ていたテレビ局のディレクターが、理道に番組出演のオファーを出したのだ。それを受けた理道はテレビで「八つ玉（四つの玉を出し入れするスライハンドを、両手で同時

に行うという高度なマジック」を披露して話題になる。じつとテレビカメラを見つめながら、ゆっくりと一つ目の玉を出す。その玉が消えたと思ったら、次の瞬間には二つに増えている。二つは四つになり、四つが八つになる。

理道はその後もテレビ出演を続け、一躍マジック界のスターとなっていく。特番で東京タワーを消し、縛られた状態で袋田の滝から落ちて蘇よみがえった。当時のマジックブームの中心には、間違いなく理道がいた。

売れっ子マジシャンとなった理道は、積年の夢を叶えようと決める。それは「リドー魔術団」の結成だった。ウォルトンの弟子だった時代から、理道は自分の一座を持ちたいと考えていたようだ。

だが、魔術団の運営には莫大な金がかかった。それまで、ほとんど道具を使わないスライハンドマジックを中心に舞台に出ていた理道は、魔術団の運営にどれくらい金がかかるかわかっていなかったのだろう。舞台に設置する大道具や仕掛け、宣伝の費用やボスターの印刷代、団員に支払う給与などで、テレビで稼いだ彼の貯金はあっという間になくなった。理道は札幌に住む叔父の自宅を抵当にして借金をしたが、その金もすぐに尽きた（叔父夫婦はそれ以来、借金暮らしをすることになる）。

そのあたりから理道の生活は歪ゆがんでいく。売れ残った東京公演のチケットを一括購入してくれた女性と交際を始めたのを機に、複数のパトロンと付き合うようになる。彼の交友関係が派

手になっていくのはこのころだ。彼には金を稼ぐ才能はなかったが、天才的な演出力、演技力があつた。金を借りるために、理道は「自分が儲かっている」という演出を始めた。理道にとって、借金もまたステージだったのだ。高級車をいくつも買い、大きなダイヤモンドのついた腕時計を巻いた。そうして借りた金を返すためにまた金を借り、困ったときは女性のパトロンを頼った。

そのころに理道は回顧録を出版し、翌年には自ら監督と主演を務めて映画を撮る。この映画は完全に駄作で、彼の借金はさらに膨らんだ。

映画の公開から一年後の一九八五年——理道が三十九歳の年——リド―魔術団は給料の不払いから解散し、彼と僕の母は離婚し、そして離婚後に僕が生まれた。

その年、理道は一度死んだのだ。

*

「私はこれまでに、数多くの過ちを犯してきました。そのうちのいくつかはみなさまもご存知でしょう——」

巨大な装置の中央にあるガラスの円筒の前に立った理道がそう口にする。観客席に緊張が走る。

「——ここ最近、私はずっと考えていました。もう一度、自分の人生をやり直すことはできないだろうか、と。私はそのために、タイムマシンを作ることにしたのです。そうです。みなさまが目になっているこの巨大な装置は、タイムマシンなのです！ この中に入り、時刻を設定すれば、私は過去の好きな時間に飛ぶことができます——」

観客席にどよめきが広がるが、理道は気にせず続ける。「——先ほど私はマジシャンの禁忌を冒すと言いました。まず、これから何が起こるか説明しましょう。これから私はタイムマシンで過去へ飛び、それが嘘ではないという証拠をみなさまに見せます。そして、私は過去への旅を何度か繰り返します。それらの奇跡のタネは、すべてこのタイムマシンにあります」

*

生まれる前に両親が離婚してしまっていたので、僕は父である理道のことをよく知らなかった。

離婚後、母は理道と出会ったデパートの販売員に復帰した。十六歳年上の姉は、高校卒業後にマジック用品の実演販売を始め、休日はマジックバーや小さな劇場でショーをする生活だった。若いころの理道と同じだ——そう指摘すると姉は不機嫌になった。

肝心の理道は離婚とともに姿を消した。

しばらくワイドショーが彼の行方について騒ぎたてた。パトロンの女が匿かくまっているという噂もあったし、暴力団と揉もめて殺されたという噂もあった。海外へ逃亡したという噂もあれば、別名でまだマジシャンを続けているという噂もあった。タチの悪い借金取りが毎日のように自宅に來たせいで、僕たち一家は何度も引越しを繰り返したらしいが、幼かったので覚えていない。姉が理道を嫌いになったのは引越しと借金取りのせいらしい。離婚するまでは、姉は理道によく懐いていたと聞く。

時は経ち、理道に代わって新しい若手のマジシャンたちがテレビに出るようになった。テレビで堂々と「竹村理道がすごいのは顔だけ」と口にするマジシャンもいた。ひとつの時代が終わったのだ。

それからしばらくすると、今度は誰も理道の話をしなくなった。理道は過去の人になった。テレビでもてはやされ、自費で映画を撮って失敗し、借金をして消えていった。それは魔術団で彼が好んだ消失マジックとは違っていた。単に、人々の記憶から消えつつあった。

理道の娘であることを隠して活動していた姉は、スライハンドの技術で少しずつ仕事を広げ、企業の宴会や、デパートでのショーに出演するようになった。二十二歳で姉は実演販売を辞め、プロのマジシャンとして生きていくことに決めた。マジシャンとして姉の収入が安定し、実家の近くで一人暮らしを始めたころ、母はデパートの上司と再婚した。

僕は九歳だった。

行方不明になっていた理道から手紙が届いたのはそのころだ。僕はおぼろげながら、その日のことを覚えている。

小学校から帰宅すると、玄関で母が手紙を持ったまま呆然と立ち尽くしていた。母の脇をすり抜け、僕は居間にランドセルを置いた。母はまだ動かなかった。僕が何か声をかけ、ようやく母は我に返った。夕方になると姉がやってきて、母から手紙を受け取った。読み終わると姉は手紙を破り、そのままゴミ箱へ捨てた。

『迷惑をかけてすまなかった。俺は生まれ変わった。借金は返した。もう一度やり直したい』たしか、そんな内容だったよ」

それから数年後に、僕があの日の手紙のことを聞くと、姉はそう答えた。「ああ、そういえば、ショーのチケットが入ってた。『もしその気があるなら、ぜひ観にきてほしい』って。行くわけないのに」

「どうして破り捨てたの？」

「覚えてないけど、再婚相手のお父さんに見せるわけにはいかないと思ったからじゃないかな。あ、もしかしたら腹が立ったからかも」

とにかく、竹村理道は復活した。

小さな劇場で行われた初回の公演は、かつてのファンで満席になった。評判はよかった。タイムマシンを使った今までにない新しいショーだという噂だった。次の公演は全五回で、それ

なりに大きな劇場だったが、発売日にチケットはすべて完売した。

姉と僕はその最終公演を観にいった。

「ひとりのマジシャンとして気になったの。同業者の間でも、とても評判がよかったから」

大人になってから僕が、理道のショーを観にいった理由について聞くと、姉はそう答えた。「もちろんあいつからもらったチケットじゃない。知り合いのマジシャンが手に入れていて、余ったからって譲ってくれたの。二枚あったんだけど、お母さんは『行きたくない』って言うから、仕方なくあんたを連れてったってわけ」

二十二年も前の話だ。本当のところはわからないが、僕は姉が自分で買ったのではないかと疑っている。

ともかく僕は、理道が姉に、公演前に、仕掛けたマジックについて覚えている。

僕たちが劇場へ行くと、入り口のあたりで若い女性に「ちょっと待ってください」と声をかけられた。

「どうかしましたか？」

姉が怪訝そうに聞くと、女性は「突然すみません」と頭を下げた。「公演のスタッフをしている若林です。理道さんから、今日の公演にあなたたちが来るはずだと聞いていたんです。最前席をお二人分用意してあるので、そこで観てください」

「結構です」と姉は断った。理道に最終公演へやってくることを見透かされて、不機嫌になっ

ているように見えた。

若林という女性は険しい表情の姉に「実は、理道さんから言伝ことづてがあるんです」と言った。

『私のマジックの仕掛けを見破って、恥をかかせたくないか？』とのことです」

「はあ？」

見事に理道のマジックにかかってしまった姉は、「絶対に見破ってやる」と意気込み、僕と二人で最前席に座ることを決めたのだった。

*

「タイムマシン」を使った理道の最初のマジックは、観客席にいた男性をステージに上げるところから始まった。

理道は男性に「何か私物を貸してください」と頼んだ。「ハンカチなどを持っていませんか？」

男性は首を振り、それからポケットを探したが、財布しか出てこなかった。

「財布は少し危ないですね」と理道は困った顔をした。「わかりました。それなら、今あなたが着ている水玉のシャツはどうでしょうか？」

突然の提案に戸惑いながら、男性はシャツを脱いで渡した。理道はそれを受け取ると、男性

を客席に帰した。

「今、私は一枚のシャツを受け取りました。これを持ってタイムマシンに乗り、過去に戻りたいと思います」

理道が水玉のシャツを大きく広げると、後ろの大型モニターにシャツを掲げた彼が映された。シャツをピンクの袋に入れ、理道は「タイムマシン」と呼ぶガラスの円筒に入る。

すぐにステージの照明が落とされた。

巨大な装置の中央、ガラスの中にいる理道だけが明るく浮かびあがっている。モニターに彼の姿が映った。彼が円筒の中にあるつまみを回すと、モニターの下部に映っていた現在時刻を示していた時計が巻き戻されていった。

二十時七分、六分、五分、四分……

十九時三十分、十八時、十七時、十五時……。

十二時。

時刻がその日の正午に設定されると、理道はつまみの横についていたスイッチを押した。それと同時に、巨大な装置から伸びていた配線がオレンジ色に点滅し、チッチッチッチ、と時計が時を刻む音がした。ガラスの円筒内で爆発が起こり、白煙とともに理道の姿が消え、すべての照明が消えた。

すると、観客席から突然悲鳴が聞こえた。

理道が消えて、悲鳴が聞こえるまでにたった十七秒。

劇場で観たときは数秒ほどにしか感じなかったが、映像で正確に測ると十七秒だった。だがそれは、照明が消えてから悲鳴が聞こえるまでの時間で、理道の姿が見えなくなってからだと五十三秒になる。

スポットライトが悲鳴の聞こえた一角に当てられる。

深々と野球帽をかぶったジーン姿の男が立ち上がった。男はそのままステージに上がり、帽子を客席に投げた。

理道だった。

観客席はざわついている。理道が何をしたのか、いまいち理解できていないからだ。アシスタントからマイクを受け取ると、理道は右手に持っていた手持ちカメラを掲げた。

「私がタイムトラベルをした証拠として、過去で映像を撮ってきました」

理道はモニターの下に、カメラから出したビデオを入れた。

映像は、カメラを自分に向けた理道の顔のアップから始まった。「タイムマシン」の中で消えたときと同じシルクハットに、同じタキシードを着ている。

「現在、一九九六年六月五日十二時、つまり今日の正午です。タイムマシンに乗って、昼に戻って来ました」

理道が劇場の入り口を映す。劇場前の時計は十二時を指している。外では日が照っており、

映像を撮ったのが正午であることは間違いないように思える。

理道が自分の右手を映し、彼がピンク色の袋を持っていることがわかる。そこには男性から受け取った水玉のシャツが入っているのだろうか。しかし、そのシャツは先ほどステージで受け取ったもので、昼の時点で彼が手にしているはずがない。

理道はそのまま劇場の中に入り、ステージの裏手から天井裏に上がった。公演の準備をしていたスタッフに挨拶し、天井から吊るしてあった箱をたぐり寄せる。箱の中に袋の中身を入れたところで、映像が一度途切れる。

観客席から再び驚きの悲鳴が上がる。

映像にあった箱は、今もまだ劇場内の同じ場所に吊るされていたのだ。スポットライトが天井に当たる。その箱は、その日の公演中もずっとそこにあった。

悲鳴が終わらないまま、映像が再開する。

今度はかなり時間が進んでいる。

すでに公演が始まっているようだ。ちょうど、ステージ上に立った理道が、淡々と鳩を出しているあたりだった。カメラはステージの様子をひとしきり映してから、突然向きを手前に変えた。

先ほどより大きな悲鳴が上がった。

モニターに、野球帽をかぶった理道が映しだされたのだ。

つまり、この公演中ずっと、劇場内に理道は二人存在していたことになる。一人はタイムマシンに乗る前の理道で、もう一人はタイムマシンに乗って正午に戻ったあとの理道だ。観客席にいた理道は、野球帽姿でステージを撮影していたのだ。

驚きの悲鳴が止まないうちに、ステージ上の理道が「天井の箱に注目してください」と言う。観客が一斉に真上を見る。

箱が開き、そこから水玉のシャツがひらひらと落ちてきた。

「どうですか？ これでこのタイムマシンが本物であると信じる気になりましたか？」

*

「シャツのトリックは簡単だよ」

公演が終わったあと、姉はそう言った。『タイムマシン』の中からステージ裏に消えたあと、アシスタントにシャツを渡して、天井の箱に入れてもらえばいい」

「でも、理道は正午の時点でシャツを持ってたよ」

「あの時点でシャツは持っていなかった。簡単な心理トリックね。袋には何も入っていなかったの。ステージで男性からシャツを預かって消えてから、アシスタントにシャツを渡しただけ」

Lies and Canon

Satoshi OGAWA

Publisher: Hayakawa Publishing

Overview

This is a short story collection by the up-and-coming science fiction writer Satoshi Ogawa, first published in 2020. It contains six stories with motifs of time and history and a wide variety of styles that combine genres such as science fiction and mystery. Science fiction tropes such as time travel and alternative histories are meticulously planned and concretely depicted (as magic tricks, experiments with electron accelerators, etc.), creating uniquely detailed worlds that capture the reader's interest. At the same time, such science fiction settings serve as backdrops for personal stories—be they at the scale of family conflicts or battles against the state—which draw the reader into even deeper human dramas. Some of these works are clearly conscious of their predecessors (drawing comparisons with Ted Chiang and Yasutaka Tsutsui), and whether they be parodies or homages, part of Ogawa's charm is the ambiguity of how seriously he expects you to take his stories. All six works are easily approachable, but their detailed settings and descriptions are brilliant enough to give you the urge for an immediate reread. This is a collection of masterpieces that crosses over multiple genres of fiction, including fantasy, historical fiction, and speculative fiction.

Summaries

“The Magician”

After reaching the pinnacle of the Japanese magic scene, magician Rido Takemura disappears, leaving enormous debts behind. He reappears ten years later during a “time warp” magic trick. Claiming to have invented a time machine, he announces that he will travel back in time and disappears from the stage. A short time later, he reappears on stage as an old man and begins to play a video recording of a conversation he had with his past self. Sure enough, the video shows the younger Rido of nineteen years before, conversing with the current time-warped version of himself, discussing future information they should not have been privy to at the time (the failure of the magic troupe). After performing this stunning magic trick, he says he must be off to save himself, and he disappears back into the past. Rido's daughter, who is also a magician, is pursuing the mystery of her father's disappearance on the assumption that Rido ruined his own life for the sake of a single magic trick. In other words, he spent nineteen years intentionally making things in his life go awry simply to pull off this one trick. “One cannot always succeed at success,” he says, “but one cannot fail at failure.” Rido's daughter gives a repeat performance of the time machine trick. Saying she is off to save her father, like Rido, she disappears into the past.

“A Ray of Light”

A novelist's father, a Shakespeare scholar, has died. He leaves nearly complete instructions in his will, but he has left the question of who will inherit his horse, a stallion named Tempest, as something for his son to decide. For some reason, the last manuscript his father wrote was on the subject of racehorses. The son has been in something

of a slump, and he reads his father's manuscript with great interest. It begins with a description of Special Week, a real-life Japanese Derby racehorse, and traces that horse's lineage back to Florries Cup, a horse imported from England in the early twentieth century to improve Japan's breeding stock. As he delves into stories surrounding the ancestry of racehorses and their travails through two world wars, the son realizes how these stories overlap his own ancestry, the story of his family.

"The Door into Time"

Three fables told the style of *One Thousand and One Nights*, a direct homage to Ted Chiang's "The Merchant and the Alchemist's Gate." The fables feature a man obsessed with victory who used to be a painter and a man who abandoned Judaism and keeps on losing. Both use the power of the Door of Time to alter their past and erase the present in an attempt to alter events that have come to them but they cannot bear to face. The fables gradually take on an air of historical specificity, and we learn that they are being told in Berlin in 1945, with the Soviet Army closing in. In place of Shahryar we have Adolf Hitler, and taking the role of Scheherazade is a Jew whose son has been killed by Hitler.

"Musica Mundana"

Daiga Takahashi's composer father has left him a piece titled "For Daiga" recorded on a cassette tape. Despite its dreary melody, Daiga is fascinated by the piece, so he heads to a place called Delgavao Island in search of its source. There he discovers a people called the Lutea, whom each own their own music and manage it as money and property. Is "For Daiga" named after him? Why did his father stop composing, and why did he force his son to engage in such grueling piano studies? These mysteries become revealed on Delgavao Island.

"The Last Delinquent"

Minimal Lifestyles (MLS), Inc. was founded in 2018 under the motto "No more fads," and started a major movement in the 2020s. People's lifestyles have settled into something leaner and more sophisticated, and fads themselves have disappeared. In 2028, Momoyama, editor of the general culture magazine *Eraser*, completes its final issue and submits his resignation. Going into a train station restroom, he alters his hairstyle, changes into a motorcycle gang outfit, and jumps onto his heavily modified motorcycle, the Godspeed. He heads to MLS, where people clad in various faddish outfits are chanting for a return of fads. Momoyama breaks into MLS and sees oddly dressed employees at a bar beyond the emergency exit. MLS members just want to uninhibitedly enjoy the things they like without being copied by others. This is a place where they can freely socialize just as they are. Eliminating fads from the world has finally allowed them to pursue their own originality. Now, no one can copy them anymore. This has been the true goal of MLS, Inc.

"Lies and Canon"

During the Cold War, Anton Petrov, who works at an electronics and radio laboratory in Moscow, confirms a phenomenon by which electrons can be sent into the past. Believing that science should be rational, Petrov is

dissatisfied with the Soviet system and works toward its overthrow by passing classified information to the United States. Receiving information from Petrov, CIA agent Jacob White plans to use his discovery to send messages to the past and overturn testimony in a certain trial, specifically, the trial of Friedrich Engels for a factory attack he was accused of. By ensuring that Engels was convicted and sent away, White figures, he can improve the future. Marx and Engels would never meet, communism would never arise, and the Second World War would never have occurred. Using its own terminology (“canonical,” “relayers,” “anchor”), the titular story for this collection is a skillful blend of speculative fiction and historical mystery.

About the author

Satoshi Ogawa was born in 1986 in Chiba City, Chiba Prefecture. He currently lives in Tokyo. He partially completed doctoral coursework at the University of Tokyo’s Graduate School of Arts and Sciences, where he researched the mathematician and logician Alan Turing. In 2015, he won the Grand Prize in the 3rd Hayakawa SF Contest for his novel *This Side of Eutronica*. After that, he won the Nihon SF Taisho Award and the Yamamoto Shugoro Prize for his second full-length novel, *Kingdom of Games*. His short-story collection *Lies and Canon* was nominated for the 162nd Naoki Sanjugo Prize, and his story “The Magician,” which is included in that book, won the Silver Medal of the Galaxy Award, China’s most prestigious award for science fiction. His latest work, *Maps and Fists*, is set in Manchuria.